

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(6)

―支援される側からのメッセージ―

金田 利子

今泉 依子

はじめに

一回目の基調提案では、競争社会から共同社会をめざすことのなかで子育てもみんなのものとなっていくのではないか、また逆に子育てのつながりを求める中で、老若男女共同参画社会への可能性が拓かれるのではないかという考えを展開しました。二回目と三回目

は地域での子育てとかわる関係づくりについて、また、四回目には生涯発達のふるさととして人間発達を支える保育園・幼稚園の役割についてとりあげ、五回目には地域の連携における行政の役割に焦点を当てました。

子育て支援の連携は、「支援する―される」を越えて相互支援の関係になっていく所に特徴があります。

そうは言っても、はじめは、より支援を必要としている人と支援する側にたつ人が相対的に存在します。

そこで今回は、視点を変えて、子育て支援において支援される側の立場に立つて考えてみることにしました。そして、支援される親の発達について見なおしている。軽度発達障害児の親の立場と健康福祉センターなどの相談員の立場の両面をもつていて、静岡大 学保育研究室の共同研究者でもある今泉依子氏にお願いしました。

一人の人間にはいくつかの立場があります。私の場合は四人の子どもの母親、静岡LD（学習障害）児親の会きんもくせいの相談担当、健康福祉センターの家庭相談員、保健センターの発達相談員などがあります。私が現在、子どもの発達のつまずき等に不安を覚え混乱しているお母さんたちの相談のつたり、療育教室の指導にたずさわったりすることは、私の子どもの存在と無関係とはいえません。子どもの一人が社会

性の獲得に困難を持つLD児であったことが私の生きかたを大きくかえ、今の私につながってきています。

私は「育てにくい子と母親の育児ストレス」をうんざりするほど実体験し、その悪循環をどうきるといいのかわからない葛藤の中で様々な人と出会い、切なさや恥ずかしさにうちのめされたり、ふみとどまつたりしながら、次第に、自分の子どもをふくめて、こういう子どもたちがいきいきと暮らせるようにするにはどんな援助が必要なのか、母親が堂々と生きていくには何が必要かを考え活動するようになりました。

ここでは私の母親としての経験と親の会のお母さんたちから寄せられた思いをもとに、LD等の軽度発達障害児を持つ母親の困難さをお伝えし、それを乗り越えていくためにはどういった援助があるといいのかについて問題提起したいと思います。

軽度発達障害児の母親であることの困難

静岡県LD児親の会「きんもくせい」には、LD、

及びその周辺児として高機能自閉症、ADHD（注意欠陥・多動症候群）ボーダー等診断を受けた軽度の発達障害児がいます。知的には大きな遅れはないため、多くの場合、小、中学校時代は普通学級に通っていますが、幼稚園、保育園時代から「気になる子」として浮きあがった存在であった子がかなりいます。ことばの遅れがあった子どもたちは、ことばの教室等で指導を受けてきましたが、ほとんどの場合障害ということばの重みに見合うような特別な配慮は受けていません。このことは、義務教育後の進学、就労などにさいしても、特別な配慮も援助もなくノーマルな子どもたちと同じ土俵で戦い続けることを意味しています。

個性と呼ぶにはそのアンバランスさがきわだっていても、それを補うものがないことでどれほど子どもたちに過剰な試練を背負わさねばいけないのだろうか……もしも、視力が弱いのなら眼鏡をかける方法があるのに……。子どもの育ちがアンバランスであればあるほど、その親にはアンバランスを受け止めるだけ

の度量とアンバランスさを個性の範囲にとどめるための技量が必要であることを実感します。しかし現状では、子どもにふりまわされ、育てる力を発揮できずに疲労している母親の方が多いように思います。

では軽度発達障害児の母親の困難さはどこからくるのでしょうか。理由として次の四つが考えられます。

①アンバランスさの理由がなかなかつかめないこと
（母親自身の気持のあり方からくる困難さ）

②子どもとの関係がとりにくいこと（子どもとの関係からくる困難さ）

③周囲の人間から非難されやすいこと（周囲の人間との関係からくる困難さ）

④軽度ゆえに専門家の援助が受けにくいこと（専門家との関係からくる困難さ）

それぞれについて具体的な状況をあげてみます。

①アンバランスさの理由がつかめないこと

子どもが軽度の発達障害児であることの困難さの第

一は、理由がわからない不安にとられることだと思
います。ここが、ノーマルといわれている子どもや、
逆に障害がはっきり目に見える形ででている子どもの
親との違いではないかと思えます。

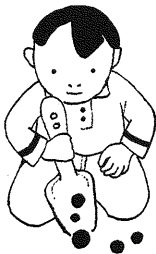
生まれたときにはどこにも異常はみえない。「なん
だかおかしい」という不安にとられる時期がどの時
期からはじまるのかでは個人差がありますが、育てて
いるうちになんとも説明しにくい違和感を覚えるので
す。第三者にいわれるまでわからなかったというお母
さんもいるのですが、どちらかというとなんとなく不
安に思っていた方が多いようです。けれども、「大き
くなれば……」「男の子だから」等のことばでわきあ
がる不安を打ち消していた時期があるようです。

私の場合もそうでした。なぜこんなに育てにくいの
かで悩み、それは子どもの側の問題なのか、それとも
私自身の問題なのかわからず、混乱しました。心理
学を専門とする側の人間としては、子どもに問題があ
ると直観しながらも、母親としての私がそれを受け入

れられないという葛藤も経験しました。むしろ、私に
問題があると思いつつも、育ちにくさの原
因は子どもにはないという仮定、この仮定のほうが母
親としては受け入れやすいのです。何故なら、育て方
をかえれば子どもがちゃんと育つように思えるからで
す。しかし、そう思うことで私自身は自分の物の見
方、感じ方に自信をなくしていききました。

私も同じですが、親の会のお母さんたちは言いま
す。診断で疑問が氷解すると。問題が解決するというこ
とではなく、アンバランスな発達の理由がわかったと
いう意味で納得するのです。診断されるまでは、育て
方が問題だと思いつつも、実際子どもの発
達に「つまずき」がでて

いて、それが障害と
は見えないほど軽い
となると、「育て方
が問題」という仮説
で説明づけたくなる



のは、先生の側としても当然のことかもしれませんし、親自身もそう思いたくなる土壌があるのです。

私は診断されるまでの親の不安や葛藤、ここが発達障害児のサポートを考える上での重要ポイントのひとつだと思います。不安を覚えた親は身近の専門家（保健婦、園の先生など）にサインを出すことがありません。聞き分けが悪いとか、ことばがふえないとか、乱暴であるとか。しかし不安があっても、障害とまでは思っていないだけにはつきりした障害の宣告が反発につながることもあります。逆に「大丈夫」「考えすぎ」ということばにすがりつきたい気持ちもあります。ここではむしろ不安な気持ちを十分受け止め聞いてくれることが問題整理の糸口につながるように思います。

②子どもとの関係のとりにくさ

私自身の記憶に残っている感覚ですが、四人の子どものうち、LDではない子のときには、私は日溜まりのなかの猫のような気分を経験しています。子どもをおなかの上に抱っこする、ピタッと子どもが身体をあ

ずけてくる、やわらかくて

……抱っこしたままウトウト

してしまいそうになる穏やかな

時間。その記憶がLD児で

ある子どもとの関係では思い出せない。もしかしたら、あつたのかもしれない。けれども不安になること

やアクシデントが多すぎて、そういう穏やかな時間の

記憶が消えてしまったのかもしれない。

抱っこしようとするとすりぬけていく感覚。はげしい

夜泣き。呼びかけてもふりむかない。目をはなさな

いように注意していてもほんの一瞬のすきにアクシデ

ントがおきる。だからどうしても、子どもを叱ること

も多くなり、親の疲労も大きくなってきます。

子どもが扱いにくそうな印象を持った場合、親の育

て方について責めたくなるかもしれません。けれども

扱いにくい子の母親が二十四時間体制の子育てでとて

も疲れているということも考えてほしいと思います。

疲れすぎて、扱いの難しい子の気持ちを受け止めるゆ



とりが無いという角度で助言してほしいと思います。

育児疲労をとるためには育児の手がわりになるような人の存在があると、この状態が緩和されるように思います。システムがそろっていないときには父親の出番がとりわけ大切だということを父親に伝える役割が必要ではないでしょうか。

③回りから非難を受けやすいこと

近所の人や、全く知らない他人に非難の目でみられる経験はしばしばあり、その度に、身がすくむ思いをしました。浮き上がっている子の母親は子どもと共に孤立しやすいのです。とりわけ、父親からも非難を受けている母親は「育てにくい子と母親のストレス」の悪循環から抜け出しにくく、子どものアンバランスさにつきあっていく力が発揮しにくいように思います。

私自身、父親が母親である私に批判的だった時期にはストレスが大きく、その苛立ちが子どもにもむかいそうになったこともあります。診断、進学、就労の場面に、父親がいたかどうかで母親の安定度には差がでる

ことを実感しますし、父親がいっしょにいるかどうかで先生側の対応にも差がでたことも体験しています。

先生との関係でも胸がつぶれるような思いを多くの親が経験しています。全国のLD児親の会にアンケートをして学校や先生との関係で傷ついたこと、うれしかったことなどを調査しました(『学研実践障害児教育』二〇〇〇年一月号)。その結果を読んで、みんな大変な扱いをされているなと思いました。これは一人の先生は何気なく言ったのかもしれないが、親はいろいろな場面で非難されているので、非難に対して過敏になっていることもあるのかもしれませんが。

私は相談員として、親と先生の二つの立場から話しを聞き、また実際に二つの立場を経験し、「気になる子」をめぐる親と先生の間には壁ができるのは片方だけの問題ではなく、両者で作っているということを感じています。この壁を低くするために、どちらの側も相手を責める気持ちを抑えて「軽度発達障害」というキーワードで子どもの育ちにくさを見、対応方法をさ

ぐっていくことを考えてはどうかと思いません。

④ 専門家の援助が受けにくいこと

アンバランスさが障害とは思えないこともあるだけに、専門家の継続的な援助は受けにくく、不登校やいじめなどの二次的な問題がでてきたからしか対応されていないように思います。実際、園や学校でも、先生が気になるということは感じていても、それが具体的な援助と結びついているケースは稀ではないでしょうか。きんもくせいのお会でも、園や学校で、担任の個人的な気配りの範囲をこえた支援は、ことばの教室の指導ぐらいで、やはりここでも、ことばの遅れがあった場合に限られています。

障害が軽いということが良好な予後とつながらないと指摘する専門家もいます。私も親の会の相談担当としてその通りと実感しています。それは理解されないこと、むしろ知的に遅れていないゆえに、逆に、できない部分への非難が大きいことも関連していると思います。子どもたちが自分が誰かの役にたっている、自

分は捨てたもの

じゃないという

ことを経験する

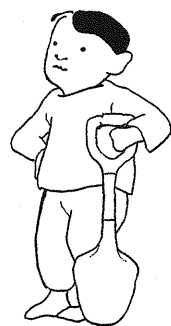
ことが少なすぎ

ます。

だからこそ意

識的に「自分は素敵」という経験を積み重ねる場が必要なのだと思います。意識して経験させていかないと彼らは「自分はだめな子」という低い自己イメージができてしまいがちです。ここが支援の重要ポイントだと私は思います。

そこで、きんもくせいのお会では、ボランティアの大学の先生や学生にお願いして、学習援助を中心にした「LD土曜教室」、モンテッソリーの教材を使った「モンテの会」、孤立しがちな義務教育以後の子ども達の居場所とソーシャルトレーニングの場として「青春講座」、問題行動がどこからきているのかを理解するための「個別指導の場」、親子で楽しい体験をするた



めの「遊びの会」などをつくりだしてきました。

しかし、親の会へたどりつくのは、親が子どもを理解するためのキーワード……LD、アスペルガー、ADHD、軽度発達障害などのことばがわかっていること、親自身に問題を解決しようという力がそなわっていないとむずかしいのです。

親の心理的レベルにあわせた援助

前記の四つの理由による困難さを乗り越えるためには、親自身の心理過程について理解しておいていただかないと、援助が効果的に働かないように思います。

私は自分自身の経験や、会のお母さんたちとの話から、親の心理過程には、①ハンディがあるかもしれないという不安を感じる時期（不安と否定で揺れ動く時期）、②診断が確定し、ハンディがあることにショックを感じる時期、③ハンディを認め努力する時期、④限界を感じる時期、⑤ハンディを受容する時期があると報告しました（『学研実践障害児教育』一九九八年六

月号）。それぞれの時期は、発展的に移っていくというよりも、揺れ動きながら出現したり、それぞれの期間の長さも人によって違います。また進路決定の時期には再び、これでいいのかという不安、これほどこのハードルが高いのかというショック、なんとかしようとして努力し、もうだめと限界を感じ（あきらめ）、これでいいと思う（受容）ということを繰り返します。

とはいえ、一つの山場を乗り越えた母親は、そのことを肯定的に意味付けていける専門家やファシリテーターのはげましによって、次の山場を乗り越える力がついていくように思います。山場をいくつも乗り越えていくことで、母親自身に育てる力が備わり、やがては、他の母親のファシリテーター役に育っていくことを、私は自分の経験と会のメンバーの力強さから確信しています。

母親の自己肯定感が山場を乗り越えるエネルギーの源であり、そこを意識した援助であってほしいと思います。それは母親を非難するだけでは生まれてこない

ものだと思います。相談を受ける側にたつと「もつと
しつかりして」と言いたいこともあります。しかし、
それで変わることができるのは子どもの状態をある程
度客観的にみられる時期になってからだと思います。
混乱しているときには逆効果です。

私自身、子どもにやさしい声で話したいと思いが
ら、そうできない状態になったこともありました。だ
からまず、①気持ちを受け止め、②困っていることを
いっしょに考えよう。③子どもと親のできていること
を確認し、その後で、④気持ちはわかるけど、こうい
うときこそ、ふみとどまって、こんな方法もいいかも
……（具体的な提案）、というような感じで相談を受
けるようにしています。そういう助言者が、私はほし
かったのです。（以上今泉）

おわりに

一言で支援するといっても、される側の心の状態を
理解しないと、善意の支援がかえって、される側を傷

つけていることがあるということがあります。このこ
とを、学習障害という軽度発達障害の場合から、どの
ような支援があると親の不安が取りのぞけるのかとい
うことを、自身の体験に基づきつつ、一方で専門家と
しての視点で提起しているのがこのレポートです。

子育てを困難にする四つの原因とそれを取りのぞく
助言そして、親の五つの心理的レベル（時期）につい
て明らかにしています。

親を不安にする障害や問題自体の特性からくる四つ
の原因と親の五つの心理的レベル（時期）との関係に
ついては、これから実践的にさらに明確にしていくこ
とが望まれます。けれども、子育て一般において
も子どもに問題を感じたとき親が不安に思う段階には
共通のものがあるのではないかと思えます。このレ
ポートは、子育て一般において、支援する側が親の問
題を受けとめる上での心のレベル（時期）をよく理解
していることの大切さを示唆してくれています。

最後に今泉さんと語る中で、このレポートには取り

上げられていないのですが、私が「なるほどそうだ」と共感した点について触れておきたいと思います。

一つは「お母さん」という呼び方についてです。相談しはじめたときは、当事者の母親としていくのですから、「お母さん」でよいのですが、ハンディを受容し他の子の問題の解決にも共に立ち上がろうとしてはじめているときには、すでに「お母さん」だけではなく、ともに支援する立場になってきている筈ですのに、その時にいたっても、名前があるのに、「お母さん」と呼ばれると、いつまで経っても、被支援者の立場にとどまらされているようでとても「対等にみられていない」という居心地の悪い感じを受けてきたというものです。とりわけ、親の方も、ある種の専門家である場合、どこかで専門家同士としての共感があってもいいのという思いになってくるでしょうし、相互支援のネットワークづくりにとつてもみすみす資源を無駄にしていくことになってしまいます。

もう一つは「専門家の子なのに」というプレッ

シャーについてです。むしろ「専門家の子だから」という方が正しいのではないか、ということについてです。「○○の親は、専門家（教師・保育者・看護婦・相談員等）なのに」という言葉を支援職の専門家の間でよく聞くことがあります。それは逆なのです。そういう状況があるだけに専門家・親は本音のほけないプレッシャーのなかにいます。むしろその気持ちを受けとめ、専門家ゆえの苦しさを分かち合うことが重要なのだという示唆です。

以上のように、支援される側の声を聞き、やがては支援されてきた人たちが支援者になり、対等にかかわる人々の相互支援の輪が大きくなるとき、競争社会ではない老若男女の共同する社会への道に一步近づいていけるのではないかと思えます。

金田（静岡大学）

今泉（LD児親の会きんもくせい相談担当）